

日本のヨット 世界の海に行く

— 白鷗号の航海記録 —

栗原 景太郎 著



日本のヨット 世界の海を行く

白鷗号の航海記録——

栗原 景太郎 著

魔のマゼラン海峡を行く白鷗号



著者との
話し合い
により検
印を廃止

N. D. C. 558

8056-063007-7764

人類の記録シリーズ 7

日本のヨット世界の海に行く

栗原景太郎

定価 600 円

発行 昭和四十六年七月三十日 ©

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社 ポプラ社

〒一六〇 東京都新宿区須賀町五
振替 東京 一四九二七一番

本アクリル
株式会社

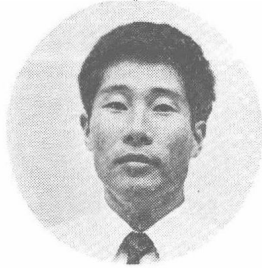
印刷所
（えいたしす）



武田治郎さん



白瀬京子さん



栗原景太郎さん

はじめに

栗原景太郎

昭和四十五年八月二十二日の真夜中、三浦半島の三崎港に一せきの小さなヨットが、ひっそりと錨をおろした。あたかも寸時のクルージングを楽しんできたかのように。

これが世界一周を終えて日本へ帰ってきたヨット白鷗の姿である。この小さなヨットは数多くの興味深い体験をしました。この貴重な体験を、ぜひとも若いみなさんに理解してもらおうと、この本を書きました。

青い海、広大な海原、それはぼくら人間を暖かく見つけてくれる偉大な母であり、夢を育ててくれるものであります。その偉大なる母の手に抱かれながら、海の向こうにある外国に行ってみたいと思ったことは、みなさんも一度はあると思います。

ぼくらはただそれを実行したに過ぎません。

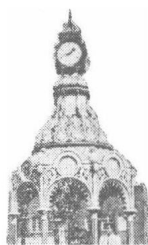
ヨッティングは、現代において、大自然のなかで人間性を回復できるただ

ひとつのスポーツだと思ひます。

そしてぼくらの体験と貴重な收穫は、人の「善意」がいかに大切かを知ったことです。人を理解すればケンカがなくなるように、外国人同士が理解しあえば、戦争もなくなるはずです。ヨット旅行はその「善意」を理解する場所を提供してくれます。

ただ注意すべきことは、この利益、恩恵を与えてくれる母なる海も、海を理解しない不心得者には、たちまち地獄のエンマ大王と変わってしまうことを忘れてはならないことでしょう。

これから、ぼくらと同じ夢を実現しようと思ひているみなさんも、このことはぜったいに忘れてはいけません。



もくじ

第一章 世界一周の旅立ち……………7

出 発……………8 マドロスの恋人、白いカモメ……………14

第二章 出発までの苦しみ……………17

神戸商船大に入学……………18 シゴキのヨット部……………19

いよいよ計画を立てる……………23 猛反対にあう……………26

また三人そろう……………29 先輩たちの偉業……………33

第三章 赤道を越えて……………41

霧中の小笠原諸島……………42 タコ騒動……………45 バンザ

イクリフに黙禱……………48 南国の島グアム島……………51

ヤップ島のアメリカ人……………56 落雷におびえる白鷗……………61

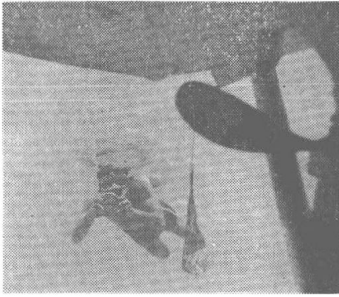
恐ろしいニューギニアのジャングル……………66

ポルトガル植民地、チモール島……………71

第四章 シケの名所インド洋……………79

イルカの踊り……………80 南国の楽園バリ島……………83 三人

同じものを食べたのに……………88 インド洋の日課……………91





第五章

嵐の岬、喜望峰
あらし みさき きぼうほう

インド洋のシケ……………95 インド洋の小国、モーリシャス……………101

海の銀座通り……………108 ホームシックにかかる……………113

アフリカ大陸の灯だ……………117 ポイント・ヨットクラブ……………121

ボート・エリザベスへの避港……………130 ケープ・オウ

グッドホープ……………135

第六章

おだやかな南大西洋……………137

ケープの休日……………138 マグロ、マグロ、マグロ……………139

無謀な冒険……………142 ナポレオンの流刑地……………146

いよいよ目ざすはリオ……………148

第七章

情熱の国南米
じょうねつ

サンバの国ブラジル……………154 大事件発生……………155

サンバの国からタンゴの国へ……………159 アディオス、

アミィゴス……………162 不毛のパンパスと荒れくるう海……………165



第八章

秘境マゼラン海峡ひきようかいきよう

- 憧れの処女岬だ…… 172 イカリをやられた…… 177
海の中を流れる川…… 184 南米大陸の最南端…… 188
恐しい人間…… 193 入江をゆるがす雪崩の音…… 196
荒れ狂うウィリーウォー…… 199 難破船の残骸…… 203
腹の立つハイジャック…… 207 ここにも日本人が…… 210
そこはもう太平洋だった…… 212

171

第九章

日本への遠い一万マイル

- 白瀬さんと再会…… 218 海底大爆発?…… 222 なつか
しき北斗七星…… 225 水は天からもらい水…… 228
誘惑に打ち勝つ…… 229 この航海で得たもの…… 231
日本の島だ…… 234

217

表紙(表)……南太平洋に行く白鷗号
表紙(裏)……白鷗号から見たマゼラン
海峡
背カット……日本を出発する白鷗号
見 返……魔のマゼラン海峡を象徴
する氷河
本 扉……マゼラン海峡に行く栗原
さん

著 者 紹 介

くりはらけいたろう
栗原景太郎

1942年東京に生まれる。戦時中群馬県前橋市に疎開。都立三田高校を経て1961年神戸商船大学航海学科に入学。ヨット部員として活躍。1965年9月卒業。1966年2月川崎汽船に航海士として入社。ヨット世界一周の初念止みがたく、1968年退社。翌1969年5月5日江ノ島よりヨット白鷗にて出発。1970年8月22日三崎港に帰港。

現住所 神奈川県鎌倉市坂の下1
ビューパレス512

ト レ ス……田代三善

営工房

写真提供……共同通信フォトサービス
(敬称略)

芳賀日出男

文芸春秋出版部

ポルトガル大使館

第一章
世界一周の旅立ち

出発を前にして



一、出 発

昭和四十四年五月五日、端午たんごの節句せつく。

太陽はサンサンとかがやき、空も海もなんという青さだろう。この記念すべき日の朝を、ぼくはある種の感動をもってむかえた。

今年になってからは、この日に出港すべく、いそがしい毎日であった。特にこの一週間というものは、搭載品とうさいひんの積み込みつこチェックなどの雑務ざつむにおわれて、満足まんぞくに睡眠すいみんがとれていないのに、ぼくの心は、この五月さつき晴れの空のようにさわやかだ。しかし胸がいっぱいなのか、せっかくの、おふくろの心づくしの朝食ものに通らない。お茶を一気にガブツと飲んで、白鷗はくおうの待つ江ノ島ヨットハーバーにいそいだ。さわやかな五月の微風ひふうがハーバーの海面をよぎり、これからのきびしい航海こうかいを祝福しゅくふくしてくれているかのようだ。

武田治郎たけだ じろう、白瀬京子しらせきょうこさんのふたりがすでにヨットの中でぼくを待っていた。ぼくがいちおう艇長ていちやうということになっている。武田は機関長きかんちやう？ 白瀬さんはコック長といったぐあいだ。この夢を実現する第一歩、いや、出発までこぎつければ、世界一周のヨットの旅も、八割方はちわりがたは終わったも同然どうぜんである。艇を美しくするために、甲板かんぱんを水道の水であらい、各ウィンチ（巻き上げ機）の金具類かなぐらうをピカピカにみがきあ

げた。今までのヨットの大航海というのは、きたならしかっこうで出たり入ったりするのが通例のようだが、ぼくはどうも性に合わないようだ。

正午、家族と最後の食事をするが、これものに通らない。自分でもわからないくらい、興奮しているのだろうか。正一時、乗艇。これでよほどトンマなことをしないかぎり、一年半はまず日本本土の土を踏むことはない。

「エンジンの、スタンバイ。」

「オーケー。」

武田の元気のよい返事が返ってきた。

「もやい（船と船をつなぎとめること）、レッコ（放せ）。」

と武田に号令をして、岸壁と白鷗をつなぐロープをレッコする。これで完全に、日本の土とは縁を切ったのだ。

エンジンのクラッチをゴーヘイ（前進）に倒す。トントントン……、白鷗はディーゼルエンジン特有の音を立てながら、すべるように岸壁を離れはじめた。

「行つてらっしゃい！」

「景太郎、がんばれよ！　むちやするな！」

友だちの蜚声も聞こえてくる。

「行つてきまーす。」

白鷗はくおうの三人もいつせいに声をそろえて叫ぶ。ここで『螢の光』でも流されたら、三人とも泣き出してしまふのではないかと、ふと、そんなことを考えた。

「お父さん、お母さん、元気でいてください。心配わいふご無用むようです。無事ぶじに世界一周を果たして日本に元気で帰つてきます。」

ぼくは心の中で、岸壁がんぺきで手を振りつづける両親の姿にむかつて、叫んでいた。伴走ばんそうして白鷗をはげましてくれているヨット仲間なかまの艇が、一つ一つ後方へ去つていった。

もうとつくにエンジンエンジンを切り、帆走はんそうしている。積荷つみにが多いので、乾舷かんげん（水面から舷側げんがわまで）が低く、波しぶきがすごい。白いユニホームをぬいで、ヨット用のスーツとカップちやくようを着用する。鎌倉かまくらの腰越こしぎえのあたりだろうか、民家みんかの屋根やねで、こいのぼりがのんびりと泳いでいるのが見える。やがて、街まちも、林も、山も、夕もやの中にとけこんでいった。

さらば日本！　さらば故郷ふるさとよ！

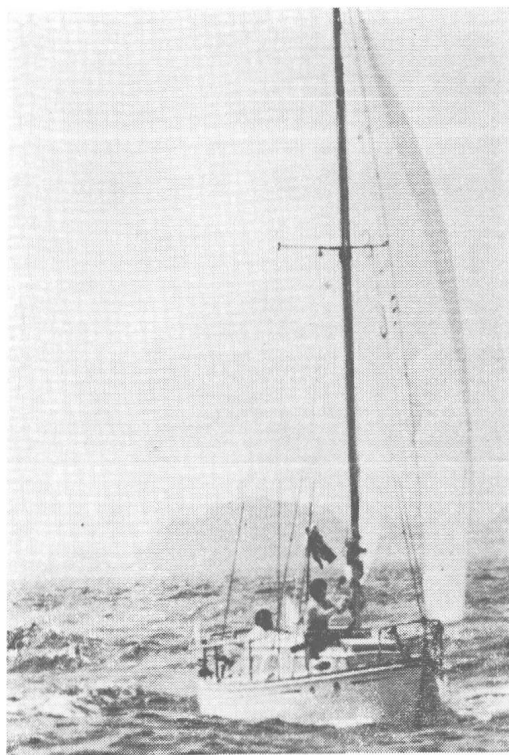
「矢は放たれた」とはこのことだろう。成功をめざして、しゃにむに全力をつくすのみである。

午後八時、江ノ島を出てからもう七時間たつ。左後方には城ガ島燈台じょうがしまとうだいの灯ひが見える。ちくしょう！

なんと遅い艇おとこだろう。いつまでも日本の灯が見えていては、未練みれんが残つてしかたがないじゃないか。早く日本から離れてしまいたい。今なら遅くない、日本に帰れる。もしかしたら死ぬかもしれないんだぞ。

まだ間に合う。そんな思いが、フツと脳裏をかすめたことも事実だ。

江ノ島を離れる時は、それでもなかったが、闇が海をおおい、ときどき、パッパッと点滅する燈台の灯だけになると、思い浮かべまいとしても、両親の姿がまぶたに浮かんでくる。あれこれ反対されたけれども、最後には許してくださった両親、親が子を思う気持ちには、まだわからないが、わが子を戦地に送る気持ちとなんら変わりがなかったにちがいない。親不幸、おまえは親不幸者だと多くの人に言われたけれど、ぼくはそんなに親不幸なのか！　そうかもしれない。しかし、きっと、世界一周を成し遂げて、



エンジン・スタンバイ 江ノ島を出てゆく白鷗号

「息子よ、よくやったぞ。」

と言われた。冷静、沈着に行動すれば、

ヨットはそんなに危険なものではない。

武田にしても、白瀬さんにしても、思いはぼくと同じであろう。特に白瀬さんの場合は女性である。

「未婚の女性が男といっしょに、そんな小さいヨットで世界をまわるなんて、非常識もはなはだしい。絶対に許さない。」

という親の猛反対を押しきってきたのである。彼女の胸中は感慨無量であるにちがいない。武田もぼくもしらん顔しながら、彼女のほおに伝わった涙を横目でみていた。女性はいいなあ、ぼくも思いつきり泣き叫んでみたかった。別離の涙、うれし涙、ひとりだったら思いきり泣いただろう。しかし艇長であるがゆえに、それができない。

しだいに海がシケはじめた。白鷗のローリング、ピッチングがだんだん激しくなった。天気図で当然そのことは予想されていた。ふつうなら、もちろん出港をさしひかえるところだが、こんなことで延期したら、それこそ世界一周などできない。よい試練である。しかし、昼間あんなに五月晴れだったのにこの変わりようは……。三人とも、ここ一週間の出港準備のつかれがひどく、船酔いに悩まされてしまった。いちばんはじめに吐いたのがこのぼく。船酔いはがまんして吐かないのが美德とされているが、ぼくの場合は、パッと吐いてしまえば、すぐ気持ちよくなってしまうので、その方がいい。吐き気、目まい、頭痛が一度に襲ってきて、ひと粒の米ものどに通らないが、齒をくいしばって、三人ともがんばっている。しかし初日からこのありさまでは、まったく先が思いやられる。この疲れを早くとってしまいうのが先決問題なので、小笠原までは、少々ルーズな航海(?)をすることにした。といっても、やはり緊張の連続であることには変わらない。

つぎの日になっても、風浪はますます激しく、艇はドスンと波のアップパーカットをくつっている。太陽が出ていないので、天測不能で位置を確認できない。黒潮のためにかなり東へ流れていると判断し

て、航路を修正した。いぜんとして船酔いはつづく。白瀬さんはともかく、商船大出身のぼくら、プロであったぼくらがやられるとは、よほど疲れているのだろう。白瀬さんは女性なので、小笠原までは、昼間のわずかな時間だけ、ワッチ（見張り）をやってもらった。

「こりや、よつぽど疲れてるんだぜ、ゲエツ。」

「船酔いなんて、商船大一年生の時いらい……ゲエツ。」

こんな調子である。夕方、波の衝撃が激しいので、トライスル（荒天用セイル）にシート（ロープ）をセツトしていたら、風が少しおちついてきた。しかし油断はまだできない。ストームジブ（荒天用小面積の三角帆）、メンスル（主帆）を二段リーフ（縮帆）のまま慎重に帆走をつづける。

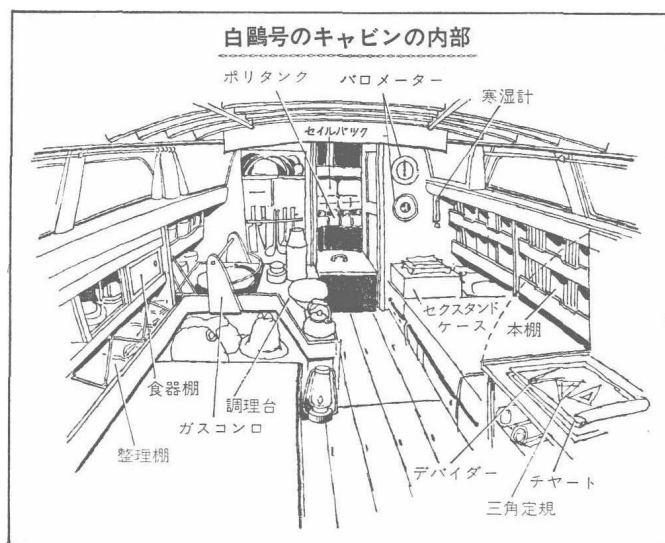
五月七日、シケの余波で波が高い。武田とぼくはようやく船酔いから解放されたが、白瀬さんはまだグロッキー気味だ。きょうもお日さまは顔を見せてくれない。推定位置しか出せない。ディレクション・ファインダー（電波方向探知器、略してD・Fともいう）さえあれば、こんな不便に泣かされることはないのだが……。あれがあれば、曇っていても、らくに位置が出せる。

しかし、このD・Fは値段が張るので買えなかった。この製造会社が原価まで値下げしてくれたのだが、その三万円というお金でも、断念せねばならなかった。軍資金の乏しさがうらめしく感じられる。

二、マドロスの恋人、白いカモメ

ここで、白鷗号とはどんなヨットか説明しよう。建造は、姫路にある奥村ボート製作所に注文した。ぼくらの先輩であり、若人の夢をつくってくれた、鹿島郁夫さんのコラーサ号（大西洋、太平洋両大洋横断）も、この奥村ボートでつくられている。設計者も、日本のヨットデザイナーとして著名な横山晃さんだ。彼の推せんしてくれたヨットだけあって、多くの願う条件に、ほぼマッチしている。

子どもの名前をつけるのにさんざん迷うように、この艇名をつけるにもずいぶんと悩んだものだ。もちろん、自分の子どもの名前をつけるように慎重になったのも当然だ。航海にいちばん大切な天体、星の名前をつけようか。それとも海に関係ある神話の中からとって、ネプチューンとか、ユリシイズとかにしようか。外国に行くのだから日本名はオミットして外国の名にしようか……。



建造は、姫路にある奥村ボート製作所に注文した。